

## 22 近代日本におけるコレラの伝播 (一)

鈴木 晃 仁

慶應義塾大学経済学部

AIDSの蔓延やSARSの脅威は、「病原体に国境はない」という常套句の正しさを再確認させてくれる。世界のグローバル化にもなつて、国境を越えて侵入することが常態化しているさまざまな感染症の伝播経路などを知ることが国際的な予防の上で急務になっている。それと同時に、それらの伝播を成立させている諸条件を、世界を鳥瞰する視点から社会科学的に考察することが要求されている。

その一方で、国境を越えて侵入した病原体の国内での伝播は、当該地域のローカルな状況によつて大きく異なってくる。人や物の移動の量や形態はどうなっているのか、病気の伝播を阻止する防疫メカニズムはどの程度の効果を持つものなのか、などの条件によつて、それぞれの地域での感染の様相は変わってくる。

すなわち、国際的な病気の流行の歴史研究には、二つの尺度(スケール)を融合した視点が必要になってくる。国境や大陸、あるいは大洋を空間的に越えて伝播していく病気のモビリティに着目したマクロな視点と、ヒポクラテス以来の風土に根ざした病気の地域性に着目したミクロな視点である。感染症の歴史研究は、グローバルな感染の構造とローカルなそれとの両者を接合させたものでなければならない。細菌による世界統一(エマニュエル・ルロワラデュリ)と並行して、それぞれの地域に特有の構造から来る被曝の不平等が現在の世界の大きな問題になっているからである。

このような視点からの研究にとつて最適の素材を提供してくれるのがコレラである。周知のように、コレラは一九世紀の初頭から何度かのパンデミーを繰り返した。ガンジス川流域の風土病であったコレラは、イギリスのインド進出やロシアの中央アジア進出、大西洋やインド洋貿易の進展―いずれも帝国主義の進行と深い関連がある事象である―にもなつて、その伝播範囲を拡大させていった。一方で、コレラが流行した

それぞれの国内においても、何度かの流行の中で伝播の構造が変わっていったことについては、アメリカの産業化と西部への拡大がコレラの伝播パターンを変えたことを論じた成果などがある。

これらの研究を踏まえて、慶應義塾大学の「暦象オーサリング」プロジェクトは、近代日本のコレラの伝播パターンの変遷に着目し、その違いをGIS（地理情報システム）を用いて表示・分析した報告を行う。東京・神奈川の府県域については、それぞれ永島と市川が分析を行うが、当該報告においては、全国の伝播について鳥瞰的な特徴をつかんで空間的に視覚化することを目標にする。

具体的には、現在同プロジェクトで開発中の日本疾病史データベースと（JED）と歴史地理情報システム（REKISHO）を用いて、以下の三つの分析を行う。①明治九年から昭和三四年までの府県別に見た日本のコレラの流行の全貌を確認する。②全国の患者数合計が四万五千人を上回る大流行があった、明治一〇年、同十二年、十五年、十九年、二十三年、二八年などの「大

流行」における全国の患者発生のパターンを府県別に分析する。③大正期に入ってからコレラの流行は下火になり、地域に限定的なものになっていく傾向を示すが、この退潮の様相とその原因を分析する。資料としては、JEDの中心である「衛生局年報」と並んで、当時の衛生当局が作成しており、当プロジェクトで組織的に収集した『〇〇病流行記（紀）事』ないし『流行誌』といった題名のもとに発行されたものが中心になる。